

木村朗子さんによるレポート 2019年9月12日（木）開催

「写真／光をうけとる」トークセッションーもうひとつの写真に触れる

Vol. 2 ゲスト 木村和乎さん

吉祥寺の写真集専門古書店「book obscura」で、店主の黒崎由衣さんから2冊セットになった木村和乎さんの作品集をご紹介いただいて、木村さんの存在を知りました。

『袖幕』『灯台』という2冊の作品集から受け取った第一印象を言葉にするとしたら「誠実さ」だったのですが、その誠実さが私にとって触れたことのない何かあたらしいもののように感じられ、心に残りました。

トークセッションをお願いするまで木村さんとは面識がなかったのですが、ほどなくしてお会いすることになりました。柔らかで正直な語り口調が、写真から受けた印象と重なりました。

トークセッション当日、私からの質問「シャッターをきる瞬間は何にいちばん意識を向けていますか？」には「光の位置・大きさを脳で処理しているけれど、考える余裕はあまりない。反応です。今！ という感じ」とお答えくださいました。

写真を始めるまでずっとテニスに打ち込んでおられたと伺って、ボールに反応するように、被写体に反応していらっしゃるのだろうかと思いました。

木村さんとのトークセッションの数日前に、アーティストのカネコアヤノさんのライブを拝聴しました。ちょうどカネコさんの新作が発表されたライブで、木村さんはカネコさんの新作のジャケット写真を担当されていました。ギターをかかえてステージに立ち、自分を大きく見せることを一切せず、全身全霊で歌にすべてを込められていたカネコさんから、木村さんの作品と同じ印象を受け取りました。老若男女たくさんの方で会場は満員でした。

木村さんは東日本大震災のとき18歳で、福島県いわき市にお住まいでした。「震災がご自分の作品づくりに影響しているということはあるでしょうか？」と質問しました。「地震のことを思い出すと、自分も自分の周りの人もいついなくなるかわからないと思う。だから、まず自分のことをまっとうしたい。その次に自分のそばにいる人たちをちゃんとみていく—ということ、震災があってはじめて考えた」とおっしゃいました。

木村さんにはじめてお会いしたとき、作品について「既視感があっても構わない。自分の体験に沿ったところから写真を撮っている」とお話していただきましたが、トークセッションでは「自分の作品に対して責任をとりたい。嘘をついて話すこともできるけど自分がしんどくなるだけだから。自分が体験したことならそれがすべてなので、それなら何も考えずに思っていることを言えるしそれが純度、説得力につながると思う」というお話も伺うことができました。

過去に対して誠実な人。その過去から光を受け取っている人。私には、木村さんの写真に写っている光は、過去から届いている光のように感じられます。その過去というのは遠い過去ではなくて、木村さんご自身が生を受けたところから今に至るまでご自分が経験されてきた道のりのすべてであり、そこと真正面に向き合うあり方が木村さんの作品の魅力なのかもしれないと思いました。

表現に写真という技法を選んでおられることについては「ゼロから作り出す音楽や絵画と違って、先ず実物があってシャッターを押せばうつる。写真には『1』が用意されているところが好き」。これから見たい写真について「この人じゃなければいけなかったという写真を見たい。その人の顔を見たときに、この人が撮ったとわかるぐらいの写真」というコメントをいただきました。

これから木村さんが人生を歩むごとに重なっていく風景があらたな作品となって私たちの目の前に差し出される時、どのような世界がひろがっていくのでしょうか？

トークセッションのあとのワークショップから交流会にいたるまで終始流れていた穏やかな時間に、つづく未来を嬉しく思った夜でした。
木村さん、そしてご来場くださったみなさま、ありがとうございました。

木村朗子